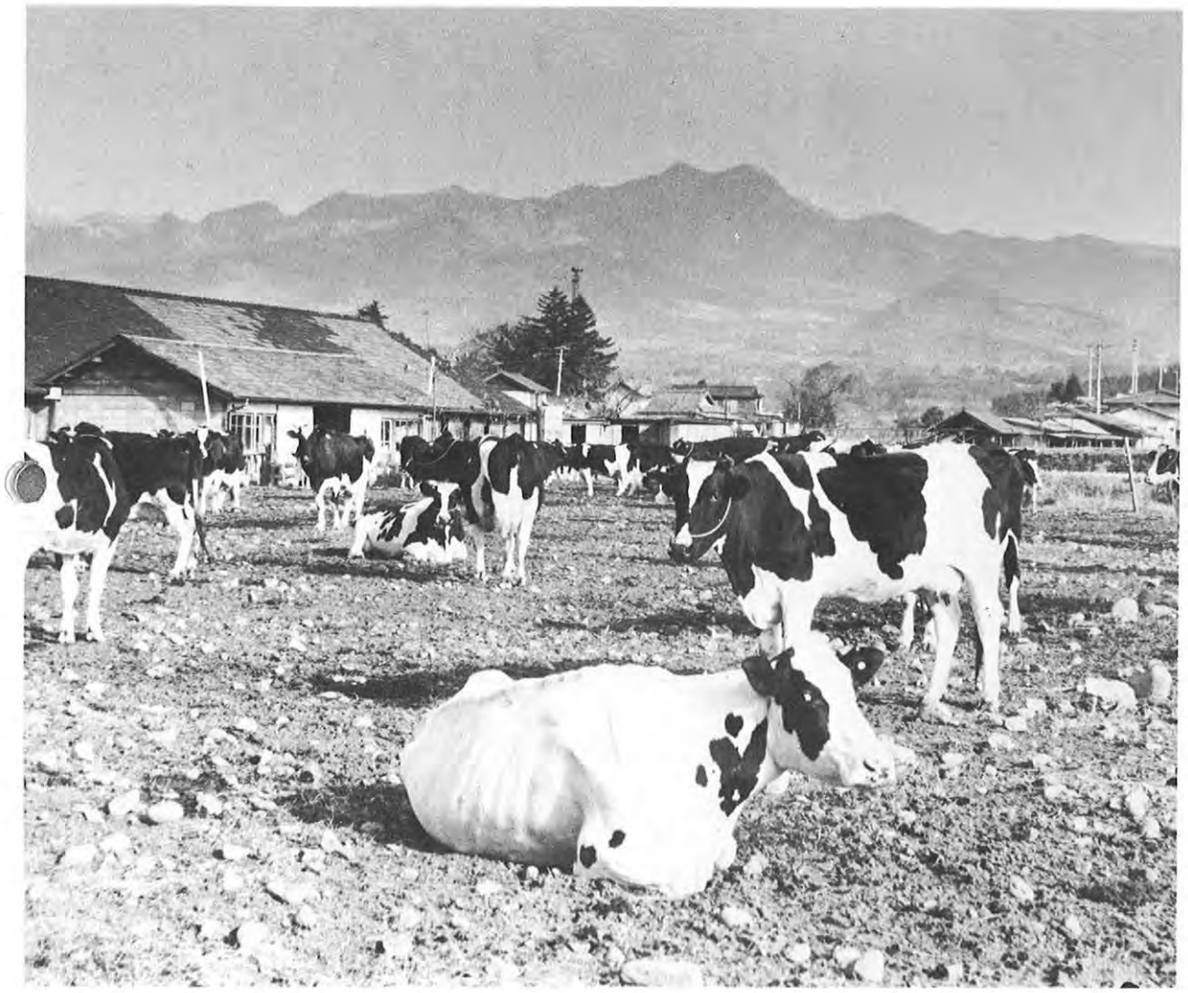

▲旭志村が誇る酪農も量から質の向上を目指す

▲村民の憩の場として公園化が進む湯舟溜池

▶200年余の歴史を刻む円通寺石門

豊かな自然と酪農の村

旭志村は、熊本市の北東約二十四キロの位置にあり、村の東端には阿蘇外輪山の一峯である標高千百十八メートルの鞍岳が聳えています。村は、この鞍岳の西麓に東西に長く広がる農村です。総面積四千六百四十六平方キロ、戸数約千三百戸、人口約五千四百人の豊かな自然に恵まれた村です。

昭和三十一年五月一日、旧旭野村と旧北合志村が合併して旭志村が誕生しました。

その年の八月一日、さらに旧護川村の一部を合併、今日の旭志村としてあゆみ始めました。

合併当時の人口は七、一一二人でしたが経済の高度成長が続いた昭和三十年代から昭和四十年代にかけて、若い人たちを中心にした人口流失が続き、最低時には、五、三〇〇人をようやく維持する状況でした。しかし、近年、農業の振興と、本田技研関連企業の進出によって、ようやく人口の減少傾向もとまり、現在では、やや増加のきざしがみえ始めています。

構造改善で良質の牛乳を生産

村の基幹産業は農業ですが、なかでも畜産が最も盛んです。

乳牛の飼養頭数は、五千頭を超え、年間一万三千百六十六トンの牛乳を生産し、九州では随一を誇り、又、牛乳の生産額は、十四億三千二百万円にも達しています。

このほか、肉牛三千五百頭、豚一万三千頭、繁殖牛四百頭が飼養されており、畜産の粗生産額は、四十二億円を超え、農業総生産額の約八五%を占めています。

いま、新明地区と、東部地区で、第二次農業構造改善事業を実施して、圃場整備事業や、畜産団地の建設をすすめていますが、今後さらに、第三次農業構造改善事業にも取りくみ、近代的な農業の村を造ることを計画しています。

有機質農業の先進地をめざして

四十二億円にのぼる生産をあげる畜産は、一方で畜産公害というむずかしい問題を提起しました。

村内で飼養されている家畜の糞尿を、人に換算しますと約三十万人分にも相当するだろうと言われています。

旭志村の農民は、畜産公害というむずかしい問題に、真剣に取り組んできました。

そして、公害対策という消極的な考えでなく、「土づくり」運動、有機質農業の推進、という積極的な方向へ発展させることに成功しました。

三十万人分に相当する家畜の糞尿もただいまでは、乾燥して発酵堆肥化され広く県内の米作農家や、野菜農家、養蚕農家などに供給されています。

ふんだんに、発酵堆肥を使って栽培された本村の西瓜は、色も鮮明で、糖度も高く、「うまい西瓜」として評判になっています。

旭志村は、いま、有機質農業と、地域複合農業の先進地になることを目指しています。

豊かな自然を生かした開発

村の象徴である鞍岳は、阿蘇国立公園の一角にあります。

山頂に立つと、東には端辺の大草原をへだて、大観峰と阿蘇五岳の眺望ができ、又、西には天草の島を浮べた有明海を眺めることができます。

昭和四十八年にこの鞍岳を越えて阿蘇町に通ずる林道が開通、そしていま、鞍岳の中腹に菊池市から人吉市に通ずる、広域基幹林道の建設がすすめられています。

鞍岳山麓一帯が、林業の面でも観光の面でも、急速に開発されてゆくことは間違いないでしょう。

農業と調和した工業の振興を

純農村であった旭志村に、昭和四十四年から旭電機などの工場が進出しました。そして、昭和五十一年には、川辺工業団地に九州柳河精機などの、本田関連企業も操業を始めました。

農業の発展と調和しながら、工業も村の発展の一翼を担っています。

菊池郡で、たった一つの村ですが、ナイター施設を完備した村民グラウンドも完成しました。

緑に囲まれ、五十万トンの水を湛えた湯舟溜池や、四国八十八ケ所を形どった円通寺公園、などの自然や史蹟を大切に守ってゆこうという運動もすすめられています。

美しい自然を大切にしながら、豊かな農業の村を育ててゆきたいと願っています。